The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本統治下ハルビンにおける「二つのロシア」 : ソビエトロシアと亡命ロシア
Author(s)	生田, 美智子
Citation	言語文化研究. 2009, 35, p. 179-197
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7391
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本統治下ハルビンにおける「二つのロシア」

―ソビエトロシアと亡命ロシア―

生　田　美　智　子

После распада Советского Союза проблема русской диаспоры приобрела новую актуальность, и Харбин снова стал привлекать внимание исследователей как поликультурный город. Однако до сих пор в поле их зрения не попадали отношения между российскими эмигрантами и советскими гражданами. Анализ газет того времени и мемуаров эмигрантов показывает, что главной особенностью повседневной жизни русских в Маньчжурии было именно сосуществование советской и эмигрантской колоний в условиях неустойчивой политической ситуации. В статье исследуется взаимодействие и взаимовлияние этих двух групп населения Харбина, между которыми существовало как ощущение культурно-языкового единства, так и социально-политическое противостояние.

キーワード：亡命ロシア，ソビエトロシア，アイデンティティ

はじめに

ハルビンが様々な文化の交錯する多文化空間であったことはよく知られている。ロシア人，ユダヤ人，ポーランド人，ドイツ人，タタール人，ラトヴィア人，グルジア人，エストニア人，日本人，中国人，朝鮮人など，ここで生活した民族名を列挙するだけでも民族の多様性がうかがえる。グローバリゼーションの現在，ハルビンの存在がクローズアップされ，その政治的，経済的，文化的，社会的処遇が研究されている。

中国という異郷でディアスポラとして存在したロシア人は，亡命者だけではなかった。帝政末期の中東鉄道建設（ロシア語では，満州国への鉄道売却までは中東鉄道Китайско-Восточная железная дорога，売却後は北満州鉄道Северо-Маньчжурская железная дорога，日本語では，清朝時代は東清鉄道，清朝滅亡後は東支鉄道や中東鉄道といわれたが，本稿では煩雑さを避けるため中東鉄道に統一する）にともなう人口移動でハルビンに赴いた人，ロシア革命で亡命した人，内戦後に国境を越えた逃亡者，ソ連時代になって中東鉄道に赴任した鉄道員など，来歴を異にするロシア語話者住民が存在した。

ここでいうロシア人とはエスニックな意味でのрусские（ロシア人）ではなく，ロシア

から来た人，つまりроссияне（帝政ロシア臣民）を意味する。民族的にはロシア人が主流であるが様々な民族からなるロシア語話者である。ロシア語では両者を弁別するタームがあるが，日本語や英語では区別できない。

日本統治下のハルビンにおけるロシア系住民について語る場合，亡命ロシア人（当時のタームでは白系露人）のみに焦点があたり，ソ連人（当時のタームでは赤系露人）との相互浸透関係が吟味されることはなかった。その結果，ソ連人（赤系露人）との関係は「共産主義者／反共主義者」「赤軍派／白軍派」の二項対立的認識にとどまっていた。

ハルビンのロシア人社会の最大の特徴は，亡命ロシア人とソ連人が混住していたことにあるといっても過言ではない。両者は数量的にも拮抗しており，特に1924－35年にかけて満洲の地には亡命ロシア人とほぼ同数のソ連人が住んでいた。赤系と白系が共存するなど，他のロシア系住民の亡命地では考えられないことである。しかも，ホスト国（清国,中華民国,満洲国）と祖国（ロシア帝国,ソ連）との関係次第で亡命ロシア人ばかりかソ連人も国籍という形でアイデンティティの選択を余儀無くされていたのである。

そのような関係を検討する場合，亡命者自身の視点を反映した史料が不可欠であるが，従来の研究ではかならずしも十分には活用されていなかった。亡命ロシア人とソ連人との関係はどのようなものであったのか。彼らと祖国との関係は継続していたのか。それは亡命ロシア人やソ連人の日常生活でどのような形をとったのか。これに対する答えは今日の異文化・異民族間の関係，異文化への適応問題を考えるうえでも重要である。どのような形で祖国との絆は切れ，あるいはつながるのか。祖国との結びつきが切れると人はロシア人ではなくなるのか。ナショナル・アイデンティティの感情はどのような形で顕現したのか。言語・文化の共通性と社会・政治的反発を同時に感じるソビエトロシアとの共存は亡命ロシア人のアイデンティティに何をもたらしたのか。

以上の問題関心から本稿は日本統治下の亡命ロシアとソビトロシアを視野におさめ，文化的アイデンティティの問題を考察しようとするものである。

1　先行研究概観

1917年のロシア革命とその後の内戦によりロシアは多くの亡命者を輩出した。亡命ロシア人のコロンビア大学歴史学教授M.ラエフの言葉をかりると，帝政ロシアはЗарубежная Россия（在外ロシア）とCCCP（ソビエトロシア）に分裂した[1)]。1920年代には，在外ロシアは「反革命」「人民の敵」という決まり文句にまみれていたとはいえ，文献に登場していた。スターリン時代になると亡命のテーマは禁止され，まるでこの世に存在しないかのような扱いであった。フルシチョフの「雪解け」時代には状況が緩和されたが，取り上げられるのはパリの亡命者文学などの西側の亡命だけで，しかも社会主義の根幹にふれない程度であった。ハルビンは，パリ，ベルリン，ベオグラードと並んで四大亡命地の一つであったといわれるが，アジア地域に対する関心の低さもあって，ハルビンが話題になる

1）Раев М. Россия за рубежом. История культуры русской эмиграции 1919-1939. М., 1994. С. 13.

ことはほとんどなかった。

この状況はソ連崩壊で一変する。これは三つの意味でハルビンのロシア人研究にとり大きな意味があった。第一は，ソ連が崩壊することにより民族共和国が独立し，縮んだ国境の外に多くのロシア人がとり残され，ディアスポラの問題が切実なものとなったことである。第二は，ペレストロイカやソ連崩壊により歴史観が変化し，在外ロシアの歴史を無視してはロシア史の全体像が描けないとの認識がでてきたことである。第三は，グローバリゼーションの時代になり，過去の人口移動の例が研究されるようになったことである。

このような在外ロシア研究，ディアスポラ研究，移民研究の流れの中でハルビンの亡命ロシア人研究にも新たな可能性があらわれるようになった。その流れをさらに加速したのが，ハバロフスク地方国立文書館の史料がアクセス可能になったことである。これは1945年に満洲に侵攻したソ連軍が白系露人事務局から押収した史料でトラック3トン分にあたる。従来はＫＧＢの保管下にあり，史料へのアクセスがほとんど不可能であったのが，一般の保管に移され，研究者が閲覧できるようになった[2)]。

こういった流れを受けて，従来は発禁であったハルビンの文学者の作品が刊行された。また研究面では従来の政治史だけでなく，社会史，文化史的な研究が多く出るようになった。さらに最近の新しい傾向として，研究史研究や史料研究，亡命ロシア人の人名事典編纂の試みなどもみられる。また，歴史と記憶の観点から興味深いのは，世界に離散したロシア系ハルビン住民がそれぞれ刊行物を発行して記憶を残そうとしていることである。更に最近のグローバリゼーションの進行をうけて，適応・同化問題や異文化混淆の問題が議論されるようになってきた[3)]。

そのようなハルビン研究隆盛のなかで，テーマは亡命ロシア人のあり方に集中していた。ハイブリッド都市として異文化交錯にスポットが当たっても，同じロシア出身でありながらイデオロギーが違う白系露人と赤系露人の交流，浸透の問題はほとんどかえりみられなかった。正面きってこの問題を扱ったのは，内山紀子の「ハルビンのロシア人住民」などわずかである[4)]。内山の研究を踏まえて，そこで疑問符が付されていたこと（ソ連国籍を取得した亡命者の数，暴力を伴う紛争はなかったのか否かなど）を，ハバロフスクの文書

2）ハバロフスク地方国立文書館の史料については以下の文献を参照されたい。生田美智子「ハバロフスク地方国立文書館探訪記」『セーヴェル』第19号，ハルビン・ウラジオストクを語る会，2004年，34－38頁，中嶋毅「ハバロフスク地方国家文書館のハルビン関係史料」『セーヴェル』第23号，2006年，77－80頁，生田美智子「トラウマとアイデンティティの模索（ハルビンの亡命ロシア人の場合）」大阪外国語大学グローバル・ダイアログ研究会編『トラウマ的記憶の社会史』，明石書房，2007年，90－111頁。

3）文化史的，社会史的な研究としてはたとえば，Печерица В. Ф. Духовная жизнь русской эмиграции в Китае. Владивосток. 1998; Букреев А. И. Книга «восточной ветви» русской эмиграции: вторая половина XX века. Хабаровск. 2003; Кузнецова Т. В. Русская книга в Китае (1917-1949). Хабаровск. 2003. 研究史研究には,Ермакова Э. В. Дальневосточная эмиграция в отечественной историографии // Россияне в Азиатско-Тихоокеанском регионе.人名事典編纂の試みとしては，Хисамтдинов А. А. Российская эмиграция в Китае. Опыт энциклопедии. Владивосток. 2002. 適応同化問題を扱ったものとしてはПоляков Ю. А. Адаптация и миграция – важные факторы исторического процесса // История российского зарубежья: Проблемы адаптации мигрантов в XIX –XX вв. М.,1996.などがある。

4）内山紀子「哈爾濱のロシア人住民たち―亡命者たち，ソ連国籍者たち―」『セーヴェル』創刊号，1995年，24-32頁。

館で得た情報などで明らかにするとともに，亡命ロシア人のアイデンティティの変容におけるソ連人や祖国との関係を見てみたい。

2 亡命ロシア

ハルビンにロシア人が流入したのは，1896年の露清密約による。ロシアは日清戦争後の日本の遼東半島領有を阻止した報酬として中東鉄道の敷設権と経営権を獲得した。中東鉄道株式会社が設立され，中国東北部を横断して満洲里，ポグラニチナヤを直結する鉄道が建設されることとなり，拠点としてスンガリー川と鉄道の交差する地点にハルビンは建設された。会社は沿線に鉄道附属地を所有することが認められ，そこではロシアの行政・司法権や森林伐採権などが行使された。

ハルビンにはロシアから多くの人が移住してきた。鉄道の収用土地面積は東部線および南部線においては大停車場でさえ100デシャチナ[5] を超えないはずであった[6]。ロシアは鉄道附属地を拡大し統治したので,中東鉄道沿線はロシアの飛地（国家の一部が別の国家の行政区画に存在する）のような観を呈するようになった。そこではツァーリの軍隊が護衛し，ロシアの法律が施行され，ロシアの通貨が流通し，ロシア語が話されていた。ハルビンは中東鉄道長官の名前であるД. Л. Хорват（ホルワット）[7] をもじり，счастливая Хорватия（幸福なホルワット王国）[8] といわれた。ハルビンは，ロシア帝国の民族構成を反映して，多民族都市であった。1913年に行われた人口調査によると，この頃には，6万8549人のロシア帝国臣民と中国人がハルビンで暮らしていた。民族にすると53になる。100人以上の人口を要していたのは，次の通りである。ロシア人3万4313人，中国人2万3537人，ユダヤ人5032人，ポーランド人2556人，日本人696人，ドイツ人564人，タタール人[9] 234人，ラトヴィア人218人，グルジア人183人，エストニア人172人，リトアニア人142人，アルメニア人124人であった。この多民族都市では45ヶ国語が話されており，主流はロシア語と中国語である。3万数千のロシア人のうちハルビン生まれは11．5%にすぎなかった。

これだけの多民族を教育するに際し，ロシア系学校では民族的な要素を表に出さずに，愛国的な要素を前面に出した。つまり，全員がрусские（ロシア人）ではないかもしれないが，全員россияне（ロシア帝国臣民）であるといって生徒を教育したという[10]。

ハルビンのロシア系住民が激増したのは，1920年代であった。ロシア本国で起こったロ

5）デシャチナはメートル法施行前のロシアの地積単位で，1デシャチナは1.09ヘクタール。
6）『東支鉄道を中心とする露支勢力の消長』上巻，南満洲鉄道株式会社，1928年，114頁。
7）1860年ポルタワ県の地主の家に生まれる。1902年から21年まで中東鉄道長官。退官後は北京で24年まで中東鉄道最高顧問を務め,1937年に死去した。フーバーの図書館には彼の回想録が残っている。
8）ロシアからハルビンに来たゲオルギー・ミハイロヴィチ大公の言葉。
9）タタールという呼称はもともとチュルク語のtat（他）ar（人）から成る他称である。帝政ロシアではモンゴルの支配を「タタールのくびき」と認識したことからこの呼称はチュルク系だけでなく,非チュルク系にも汎用された。当該時代では自称・他称としてロシアのチュルク系・モンゴル系の諸民族に一般に使われた。
10）Bakich, O., *Émigré Identity: Case of Harbin. Harbin and Manchuria: Place, Space, and Identity*, Durham, N.C. : Duke University Press, 2001, pp.53-54.

シア革命とその後の内戦の結果，多くの旧ロシア帝国臣民がロシアを逃れた。その数は200万人といわれる。避難民，逃亡者は世界中に離散し，中でもフランス，ドイツ，チェコスロヴァキア，バルト諸国，バルカン諸国，中国が多かった。東に難を逃れた人は，ほとんどがハルビンをめざした。

ロシア系住民は約60年間にわたりハルビンで暮らした。1898年から1960年までで，世代にすると3世代になる。第一世代は中東鉄道の建設者や従業員，企業家であった。ロシア革命と内戦後の1920年代にはロシアから難民がハルビンを目指して押し寄せ，ロシア系住民の人口は激増した。亡命先で育った彼らの子供が第二世代である。1930－1940年代の半ばに生まれた第三世代にとってはハルビンが唯一の故郷である。

ロシア系住民の第一世代に属するラチンスカヤは亡命者が殺到した理由を次のように説明している。

> ハルビンに到着してからの我々の生活様式を左右していた主要なことはここではロシア語が話されていることであった。ロシア語は中東鉄道沿線で話されていた。学校，ギムナジウム，大学の授業はロシア語で行われ,新聞，雑誌，本はロシア語で出版されていた。通りの名前もロシア語だった。店にはロシア語の看板がかかっていた。われわれが関係しなければならない中国人もロシア語を話せるので，中国語を習う必要がなかった。他の国へ亡命した人と違い,「満州へ亡命した人」はこの点で恵まれていた。他の国へ亡命した人の子供や孫のほとんどはもうロシア語を話さない。おのが言語を守れなかったことで,ロシア文化の貴重な玉手箱を開ける黄金の鍵を永遠になくしてしまったことが分からないのだ[11]。

亡命者・逃亡者・避難民は「ロシアのハルビン」という「レプリカ」の中で暮らしていた。亡命地の状況に適応しなければならなかった西側の亡命地とは違う生活環境であった。この頃のハルビンのロシア系住民は二つの層からなっていた。старожилы（古参のロシア系住民）とэмигранты（エミグラント）であった。

亡命者の数が最高潮に達したのは，1922年，白軍派の最後の砦であった沿海州が赤軍派の手におちた時だった。中国側の統計によれば，ロシア系住民の人口は過去最高の15万5402人になっている[12]。

ロシアが内戦の混乱で中東鉄道を省みる余裕がない時期は，中国にとって利権回収のチャンスであった。これについては中国史の専門家上田貴子の論考がある。上田の研究によると利権回収は，1917年から20年にかけての軍事・警察権の回収と幣制回収がなされた第一段階，1920年代前半，中東鉄道が中露共同管理になり，市政管理局・東省特別区行政長官がおかれた第二段階，1926年自治権が回収された第三段階に分けることができるという[13]。

11）Рачинская Е. Перелетные птицы. Воспоминания посвящается Харбину и харбинцам. San Francisco: Globus. 1982. C. 1- 7.

12）石方・刘爽・高凌著『哈爾濱俄橋史』黒龍江人民出版社，2002年，80頁

道路の名称もロシア語表記から中国語表記に改称され，ハルビンは中国の町へと変化していった。

3 ソビエトロシア

ソビエト市民が亡命者の町ハルビンに流入したのは，1924年に中ソ間の協定（正確には二つの協定と七つの宣言）[14] が締結された結果である。1924年の協定によって鉄道は中ソ共同経営の完全な合弁会社となった。共同経営となった中東鉄道で勤務できるのは，ソ連国籍者か中国国籍者であった。中東鉄道は，林業，鉱山業，病院，教育機関などの業務も手がけていたが，それも全て共同経営に移行した。この協定により鉄道とその沿線は「国家の中の国家」ではなくなった。

ソ連の新聞『アムールスカヤ・プラヴダ』によれば，9月にハルビンのソ連領事館を「ソ連国籍の取得を望む数百のハルビン住民が取り囲み」，一日で1500人が押し寄せた日もあったという[15]。1924年に中東鉄道の従業員は，管理局や鉄道警察を除いて1万6657人であり，その一部は中国国籍に移行した[16]。1925年の新聞『ルーポル』によれば，グランドホテルは今や「ハルビンのクレムリン」に変貌したという[17]。というのは，全館の半分をソ連から来た鉄道幹部や政治活動家が占めていたからである。南満洲鉄道に勤めていた黒澤忠夫によれば，「その当時蘇聯側は猛烈にプロパガンダを始めた。蘇聯側は転向者に対しては月給は従来の三倍に増し，社宅もやる，その他いろいろの特典をやる，一口にいえば大いに優遇するというのだ」。一方，中国人になったエミグラント従業員は，「勿論蘇聯側からは昇給は認められず，所謂『萬年月給』で，栄転などといふことは思ひもよらず，相当以上に蘇聯側からは苦しめられたわけである」[18]。ソ連国籍も中国国籍も取得せずエミグラント（無国籍者）のままに留まったものは職を辞さなければならなかった。

7年後，ハルビンの人口は17万3283人で，そのうち中国人が10万3106人で，エミグラントが3万44人，ソ連市民が2万6633人，中国国籍を取得したロシア人が6793人，日本人が2538人，朝鮮人が823人，外国人（様々な民族）が2346人になっていた[19]。これらの数字は，鉄道職員のかなり多くの部分がエミグラントの道を選んだことを示している。

1929年，従来から利権回収のテンポを速めていた中国とソ連の間で中ソ紛争が勃発した。ロシア側資料は以下のように報道していた。5月28日，ソ連領事館に中国の警察が入り，館内にいた39名を逮捕した。「共産主義のプロパガンダ」を中国国内で行うことを禁じた奉ソ協定に違反したからだとされた[20]。さらに6月10日，中東鉄道の中央電報局でも9名が

13）上田貴子「1926年哈爾濱における自治権回収運動と地域社会―地域エリートと国際性」『EXORIENTE』第5号，大阪外国語大学言語社会学会，1998年，209-237頁。
14）Аблова Н. Е. КВЖД и российская эмиграция в Китае. Международные и политические аспекты истории (первая половина XX века). М., 2005. С. 210.
15）Амурская правда. 1924. № 1356.
16）Китайская восточная железная дорога. Статистический ежегодник. Харбин. 1925. С. 14.
17）Рупор. 1925. № 1086.
18）黒澤忠夫『白系露人』，毎日新聞社，1943年，7頁。
19）Коммерческий Харбин 1931-1932. Харбин. 1932. С.18.

逮捕され，管理局長のА. И. Емшанов（エムシャノフ）が逮捕され，代わりにエミグラントのБ. В. Остроумов（オストロウモフ）が就任した。鉄道全線で200名以上のソ連国籍の従業員が逮捕された。管理局長エムシャノフを含む約60名のソ連国籍者がソ連へ送還された[21]。東省特別区全体で1683名が逮捕され，うち女性が80名，子供が30名だった[22]。

7月17日，ソ連はついに国交断絶を宣言した。8月16日，ソ連軍は国境を突破しジャライノールと満洲里を攻撃し，250名の将校と9000人の兵士を捕虜とした[23]。ソ連軍に惨敗した中国はハバロフスクで和平会議をひらき，ハバロフスク議定書に調印した。

議定書により，中東鉄道の原状回復，逮捕されたソ連人の釈放，軍隊の撤退が約束され，中ソ紛争は終結した。紛争中に採用された亡命ロシア人は解雇され，ロシア人白軍の武装は解除され，その組織者は東三省以外に追放された[24]。

亡命ロシア人の中ソ紛争への関わりは様々であったが，白軍派のコサックが2400人住んでいた三河では150人の亡命ロシア人が殺害されたという[25]。三河の悲劇はロシアの内戦の延長であった。中ソ紛争の機に乗じてボリシェヴィキに勝利しようとした白軍派の亡命ロシア人の試みは大きな代償を払うこととなった。

1931年，日本が中国東北部を占拠するという事件（満洲事変）がおこった。ホスト国である中国の一部が第三国日本の支配下に入ってしまったのである。1932年2月5日,亡命ロシア人は日本人居留民と共にハルビンに入城してきた日本軍を日章旗を持って歓迎した[26]。日本人が中国の利権回収の試みから亡命ロシアを守ってくれると期待したのである。

日本は満洲を実質支配することで，長大な地域において新興の巨大国家ソ連と国境を接することとなった。満洲国の建国が宣言された1932年から1934年までの間に小規模な国境紛争は152回あったという[27]。ソ連は中東鉄道の売却を考えるようになり，ついに1935年ソ連と満洲国の間に売却協定が調印された。今度は中東鉄道のソ連従業員がソ連に引き揚げるか，エミグラントになる番だった。今回の売却協定によりハルビンの亡命ロシア人の生活はまたもや激変した。ソ連人の多くはソ連に引き揚げた。ソ連人に代わって日本人が大挙して押し寄せた。1935年の新聞『ザリャ』は，2月と3月の２ヶ月間で2000人の日本人が到着したと伝えている。また，引き揚げるソ連人が陥ったパニックを「毎日赤いパスポートと決別したい人の請願書が1200通白系露人事務局に」，「大安売りの前日―鉄道員引き揚げ前のハルビン」「153人の鉄道員のうち150人が非帰還者」という見出しで伝えている[28]。1924年に失職した白系露人たちも復職した。満洲の全ての鉄道は南満洲鉄道の管轄となり，中東鉄道は北満洲鉄道と呼ばれるようになった。

20）Рубеж. 1929. 27 июля.
21）Документы внешней политики СССР. Т. 12. С. 380-382.
22）Аблова Н. Е. КВЖД и российская эмиграция в Китае. С. 210.
23）Там же. С.212.
24）島田俊彦「東支鉄道をめぐる中ソ紛争―柳条溝事件直前の満洲情勢―」『国際政治』第１号, 1970年, 5頁。
25）Рубеж. 1929. 19 октября.
26）李術笑編著『哈爾濱歴史編年』哈爾濱出版社，2000年，238頁。
27）西原征夫『全記録ハルビン特務機関　関東軍情報部の軌跡』毎日新聞社，1980年，46-47頁。
28）Заря. 1935. № 68. №71.

ソ連に引き揚げるロシア系住民を乗せた列車には「母なるロシアよ，おのが子供を受け入れよ」という横断幕がかかっていた。彼らは粛清と収容所が自分たちを待っているとは予測できなかった。ソ連に引き揚げた元ハルビン住民を待っていたのは過酷な運命だった。彼らは執拗に引き揚げを勧められたのだが，祖国では歓迎されるどころか，реэмигрант（レエミグラント，帰還亡命者）と呼ばれ，特別のエスニックグループのように扱われた。1937年9月20日，「中東鉄道の元従業員と満洲からのレエミグラントに対する粛清実行について」が発令された。指令によれば「いわゆるハルビン人」のリストは2万5000人に達していた。そのうち，4500人はすでに前年に粛清されていた。加えて，1938年1月31日には全ソ連邦共産党中央委員会内務人民委員部に，粛清の対象を「ポーランド人，ラトヴィア人，ドイツ人，エストニア人，フィンランド人，ギリシャ人，イラン人，ハルビン人，中国人，ルーマニア人」からなるスパイ活動，破壊活動を行う分子の殲滅にひろげるよう命令が下された[29]。

ハルビンに住んでいたロシア系住民は祖国に引き揚げたにもかかわらず，「レエミグラント」というレッテルを貼られ，ハルビン人であるがゆえに敵性民族のような扱いを受けたのである。

話をハルビンにもどすと，ソ連に引き揚げなかったロシア系住民のうち，一部はハルビンを去り，上海や北京へむかった。他の者は永久に中国を離れた。約4万人が日本化したハルビンに残った[30]。

4　二つのロシアとそのアイデンティティ

日本は，対ソ戦略上，領域内の亡命ロシア人に対する管理，統制を強化するために，1934年12月28日に「白系露人事務局」を設立した。事務局の活動は，「満洲国」政府から統治・管理されながらも，ロシア人自身が亡命者社会の内部構造を把握し，組織化しようとする両面性を持っていた。事務局は，細部にわたり個々の亡命組織や亡命者の社会活動を指導し，その法的，経済的，文化的利益を擁護し，亡命者間の訴訟を調停し，亡命者の人口移動を把握した[31]。

白系露人事務局の機関紙『ルチ・アジイ（アジアの光）』（1935年5号）は，白系露人事務局の課題をのべ，以下のようにそれを評価している。

1 満洲帝国に住む亡命ロシア人の物質的および法的状態の強化を促進する。
2 亡命者に関係する全ての問題に関して帝国の当局と接触をはかる。
3 亡命者の問題に関し当局のしかるべき機関に協力する。

29）Merrit, Steven. «Матушка Россия, прими своих детей!» - Archival Materials on the Stalinist Repression of the Sovien Kharbintsy// Россияне в Азии. № 5. 1998. C. 203-229.
30）Bakich, O., *Émigré Identity: Case of Harbin. Harbin and Manchuria: Place, Space, and Identity*, Durham, N.C. : Duke University Press, 2001, p.61.
31）ГАХК. Ф. 830. Оп. 1. Д. 1. Л. 1.

こうして，年明けの1935年に，以前は多くの組織に分散していた亡命ロシア人は，権威ある自己の統一代表組織を持った。今後はこの機関が帝国の全ての亡命者問題を担当する。満洲国政府は亡命ロシア人を満洲に住む五つの民族のひとつとみなすと再三宣言してきたが，今や，それが実行に移されたのだ[32]。

白系露人局の機関誌はこの時点では亡命ロシア人が五族の一角を占めているように理解していたようである。しかし,その地位は不安定なものであった。国際情勢次第で，主要民族である五族の一員に入れられたり，はじきとばされたりした。「満洲国民の如き」扱いというのが実情であった[33]。事務局への登録が義務づけられたことで，この組織は「亡命者の政府」のごとき性格を帯びるようになった。満洲国の行政機関としての白系露人事務局は，亡命ロシア人と満洲国との相互関係を調整する「亡命ロシアの領事館」の役割をはたした。それを象徴するかのように，白系露人事務局の建物は「三色旗の家」といわれ，ロシア帝国の三色旗がひるがえり，二階にある応接室には故ニコライ二世のポートレートがかかっていた。

1935年の中東鉄道売却によりソ連人が引き揚げた時，人口のバランスが崩れたが，それでも6000人ほどのソ連人がハルビンに残った。彼らは亡命ロシアの白系露人事務局に対抗すべく「ハルビン蘇聯居留民会」の設立を申請し，1935年7月に満洲国はこれを許可している[34]。この間の事情は『哈爾濱俄僑史』によれば,おおむね以下のようなものであった。

ハルビンにおけるソ連居留民は一貫して中東鉄道管理局およびそれがコントロールするハルビン公議会の庇護のもとにあった。すなわち，中ソ合弁会社の時期においては鉄道管理局におけるソ連側代表がソ連居留民の代弁者であった。したがって1935年以前にはハルビンにはソ連居留民会なる団体は存在しなかったのである。1935年３月にソ連は一方的に日本に鉄道を売却しソ連のスタッフは続々と帰国した[35]。

従来は鉄道会社が住民を庇護・統治するという独特の支配形態をとっていたのだが,会社が満州帝国に売却された結果，それに代わる組織を設立する必要性が生じたのである。以前にもソビエト通商代表部のような組織はあり，織物シンジケート部，工業品輸出部，食料品輸出部，魚缶詰輸出部，毛皮同盟部，木材輸出部，煙草輸出部，溶鉱土製品輸出部，薬品材料部，手芸品絨毯輸出部，技術品輸出部などを擁していた。しかしながら，ソ連人が減少した今，ソ連居留民全体の保護を目的とした団体が設立されたのである。白系露人事務局に対抗するためにソ連人居留民会と称する団体が成立したのは，1935年3月に中東鉄道が日本へ譲渡された4ヶ月後の1935年７月のことであった。

32）Луч Азии. 1935. №. 5.
33）満洲帝国協和会「協和会運動基本要綱」『満洲評論』第24巻第13号，1943年，8-9頁。
34）『満洲国政府広報』第401号，国務院総務庁，1934年，115頁。
35）石方・刘爽・高凌『哈爾濱俄僑史』，黒龍江人民出版社，185頁。

満洲国はソ連居留民会の設立を許可する一方で，ソ連に対する締め付けを強化していった。標的になったのは教育機関であった。たとえば,5月11日の『朝日新聞満洲版』の記事はハルビンのソ連系中学校の閉鎖を伝えている。この学校は1935年10月ソ連居留民会が設立したもので，閉鎖の理由は，「一，満洲国の根本方針に反したる教育を施さぬこと，二，満洲国の諸法規を尊重すること，三，教科書，教材も満洲国当局に提示し認可を受くること」[36] という設立条件に反したからであるという。

当時ハルビンに滞在していた風間正太郎によれば，この中学校は，初等小学校が4年間，高等小学が3年，中等教育が3年の計10年制で，日本の高等小学校にあたるものであった。7歳から入学が許可され，248名の男女生徒が学んでいたという[37]。

日本はソ連系の中学校を閉鎖しただけではない。亡命者系の学校に関してもこれを閉鎖し日本の学校システムにつくり変えていったのである。満洲の教育については内山紀子[38] と中嶋毅[39] の一連の研究があるので，それを参照されたい。

1936年に日独防共協定を締結した日本統治下ではソ連の中学校が存在するのは無理であった。満洲は防共週間を設定してソ連を警戒した。たとえば1938年5月6日の朝日新聞はメーデーに対抗する防共週間の動きを伝えている。

> 哈爾濱では四月二八日より防共週間を開催，五月一日の赤色ソ連のメーデー当日，哈爾濱白系露人事務局の主催で在哈白系露人一万人が午後一時を期して反共の旗幟を高揚して反共大会を開催，哈爾濱全市を防共一色に塗りつぶした[40]。

日本は二つのロシア（亡命ロシアとソビエトロシア）に対し包摂と排除で対処した。すなわち，亡命ロシア人には満洲国の構成員として日本化をうながし，ソ連人は最も警戒すべき外国人として追い出しをはかったのである。亡命ロシア人は「亡命者バッジ」を着用することで満洲帝国の一員にくみこまれ，ソ連人は他者として排斥の対象となった。亡命ロシア人に対しては，学校では皇居や満洲皇帝の宮殿の方向にむかって最敬礼をさせた。ロシアの司祭は日本の天皇と満洲国の皇帝の健康を祈らなければならなかった。ロシア系住民は，満洲国建国記念日，日本の祝祭日，反コミンテルンの日など，日満のすべての公式祝日，イデオロギー的なキャンペーンに参加しなければならず，日本社会の作法を身に着けるよう強要された。さらに，大東亜戦争の進展とともに，白系露人事務局は特務機関の手から満洲国政府の手に移され，白系露人部隊（浅野部隊など）[41] も満洲国軍に加え

36）『朝日新聞満洲版』，1938年5月11日。
37）風間正太郎「国境の街ハルビン便り」『文芸春秋』1938年，9月号，252－256頁。
38）内山ヴァルーエフ紀子「哈爾濱のロシア人学校―初等・中等教育編」『セーヴェル』，第9号，ハルビン・ウラジオストクを語る会，1999年，1-30頁,同「哈爾濱のロシア人学校（高等教育編①）」同誌第10号，1999年，63-93頁,同「哈爾濱のロシア人学校（高等教育編②）」同誌第11号，2000年，33-51頁。
39）中嶋毅「ハルビン法科大学小史（1920-1937年）―中国在住ロシア人の知的区間（上・下）」『思想』第952号，2003年8月，第953号，2003年9月,同「ハルビン工業大学の歴史―中国にあったロシア人高等技術教育機関」『人文学報（東京都立大学）』第357号，2005年3月。
40）『朝日新聞満洲版』，1938年5月6日。

られた。

ソ連ではハルビンからの引揚者は敵やスパイとみなされ，収容所に送られた。満洲ではロシア系住民は「満洲国民の如きもの」として周縁化され，厳しい統制下におかれた。彼らの唯一の故郷はハルビンであったが，そのハルビンはますますロシア的ではなくなっていった。日本化の強化はロシア文化の担い手としての彼らの自意識を鋭くさせ，一定程度彼らの団結を強めた。

5　客体としてのアイデンティティ

すでに述べたように，ハルビンでは亡命ロシア人，ソ連国人ともに，アイデンティティの問題は国籍問題，職を失うか否かの死活問題とセットでつきつけられた。かつての「幸福なホルワット王国」時代にはアイデンティティの問題が生ずることがなかった。ハルビン滞在は一時的ないわば「出張」や「出稼ぎ」にすぎなかった。ここに骨をうずめようと思う人はいなかった。ハルビンでの彼らのセルフアイデンティティは無主の土地に西洋文明の恩恵を施した西洋文明の体現者，パイオニアであった。この意識は中東鉄道建設25周年の時に出版された豪華記念本の至る所に読み取ることができる。このころ既に鉄道の建設者であったロシア帝国は崩壊して存在せず，ハルビンは亡命者の街になっていた。ロシア系住民はみずからを「偉大な科学と技術をもつ」西洋の一員と位置づけ，未開の土地に「文明と発展」をもたらしたパイオニアであると自負していた。ホスト社会に対する文化的優越感は西側に亡命したロシア人には見られないものである。

1924年に中東鉄道の共同経営者となったソ連人のハルビン流入はロシア帝国時代からの古参鉄道員の立場を激変させた。ただ帰りそびれただけの旧ロシア帝国臣民の帰属先を在外ロシアにしてしまったのである。古参住民は亡命者に編入され，新しく赴任したソ連国人と対立した。亡命ロシア第一世代の3. Н.Жемчужная（ジェムチュジナヤ）は中東鉄道の共同経営者となったソ連人の到着がハルビンのロシア社会にもたらした政治的な対立を以下のように回想している。

> 中東鉄道がソ連の手に移った時，新しく赴任したソ連人は「エミグラント」に取って代わった。古くからの住民はエミグラントといわれるようになった。（中略）「ソヴェチキ（ソ連人）」は政治的な恐怖をもたらし，住民を「身内」と「他人」に分けた。街を建設した人達は革命のことは人づてに聞いていただけだったが，「エミグラント」「白軍派」「人民の敵」になってしまった。しかし，これは中東鉄道の領域でおこっていたことで，町のその他の地域ではソ連国人と亡命者は仲良く暮らしていた[42]。

41）満州国軍治安部に属する一部隊として編成された白系露人部隊で，指揮官が浅野節であったことから，浅野部隊といわれた。ハルビン特務機関長の指揮下にあった秘密部隊。

42）Жемчужная З. Путь изгнания. Урал, Кубань, Москва, Харбин, Тяньцзин. Воспоминания. Tenafly, N. J., USA: Эрмитаж. 1987. С.178.

中東鉄道が中ソの共同経営に移行したことは，ロシア系ハルビン住民のアイデンティティ危機を作り出した。彼らはソ連との関係において国籍問題という形で自らのアイデンティティを決定しなければならなかった。すなわち，協定により中東鉄道およびその関連企業で働いていたロシア人は中国国籍かソ連国籍を取得しない限り失職することになったのである。ハルビンの亡命ロシア第三世代でトロント大学教授であるバキチによればソ連との関係性により鉄道員は四つのタイプに分けることができるという。第一は，「ソ連国籍」を申請したが，ソ連パスポートの代用品（ソ連人のものとは異なっていた）をもらい，勤務を続けた人である。Советские подданные（ソヴェツキエ・ポダンヌィエ，ソ連国籍者）を短縮して，совпод（ソフポド）といわれた。あるいは発音が似ていることからсовы（ソヴィ，ふくろうの意）ともいわれた。第二は，中国国籍を取得した人でкитайские подданные（キタイスキエ・ポダンヌィエ）を，短縮してкидподы（キトポドィ）あるいは発音をもじってкиты（キトィ，鯨の意）といわれた。しかし中国のパスポートには「ロシアのエミグラント」と付記してあったという。第三は，квитподы（クヴトポドィ）である。失職しないためにソ連国籍を申請したが，代用パスポートの取得までには至らず，申請証明書квитанция（クヴィタンツァ）を受け取った段階の人である。第四は，эмигранты（エミグラントィ）で中東鉄道を解雇された無国籍者である[43)]。

ソ連人と亡命ロシアの対立の構図は経済をはじめあらゆる居住空間に波及した。1924年から1935年までハルビンでは，あらゆる面でソ連人と亡命ロシア人とは拮抗していた。それは人口面にも，政治イデオロギーや軍事行動面にも，さらには日常生活にまで及んでいた。たとえば，ソ連系学校／亡命系学校，ソ連系商店／亡命系商店，ソ連系銀行／亡命系銀行，ソ連系新聞／亡命系新聞，ピオネールやコモスモール／スカウト，ソ連の祝日／亡命者の祝日，ソ連人居住地（新市街）／亡命者居住地（プリスタン）が共存していた。ジェムチュジナヤによれば,ソ連人は豪勢な社宅に住み，エリートの住む新市街に住んだ。亡命者はプリスタンに住み，さらに貧しい人は郊外の貧民窟であるナハロフカに住んだ。亡命者の家にはニコライ二世の肖像画がかかっていたが，ソ連人はそれをとりしまるだけの権限はなかった。というより，「ソ連人は無神論者でコミュニストを自負していたが，きわめてブルジュア的な生活を送っていた」[44)]。

滞在が長くなるにつれ，ソ連人の生活はますますハルビン的になっていった。ハルビンの日常生活では，ソ連人と亡命者の間にほとんど違いはなかった。ソ連人も本国から離れた陸の孤島であるハルビンではロシア帝国の往時の生活習慣にもどり,クリスマスや復活祭を祝っていたようである[45)]。ハルビン人の回想を読むと，しばしばредиски（レジスキ，ラデッシュの意）という言葉が散見される。これは中東鉄道が中ソ合同経営になってからも職を失くさないようにソ連国籍を取得した亡命ロシア人のことである。外は赤い（赤軍

43）Bakich, O., *Russian imprints: bibliography as history, 1896-1923: materials for a definitive bibliography*, New York: Norman Ross, 2002, p.14.
44）Жемчужная. Указ. соч. С. 184.
45）Там же. С. 203.

派）が，中は白い（白軍派）からである。亡命ロシアとソ連人の境界はだんだんあいまいになっていった。

1929年の中ソ紛争の時，ソ連人の多くが利権回収を進める中国に対するストライキを決行し，ソ連に引き揚げた。帰還せずに中東鉄道に残った鉄道員は「非帰還者」「反対者」と呼ばれるようになった。紛争は収束したが，引き揚げたソ連の幹部たちはハルビンにもどってこなかった。高価な毛皮を身にまとった彼等はソ連ではブルジョワ化したと見なされ，持ち物を没収された。

ハルビンに残留したソ連人の「非帰還者」もスト破りの裏切り者と見なされ，職場を追われた。彼らにとって代わったのは中ソ紛争後モスクワから送られてきた新参のソ連人だった。ジェムチュジナヤの娘でアメリカに亡命したE. A. Якобсонヤコブソン（ソ連で教育を受け，父の中東鉄道赴任に伴ってハルビンで居住）は，次のように回想している。

> 紛争収拾後，ソ連政府は「忠誠でなかった者」に復讐をした。ソ連国籍取得を拒否した全ての人にとってかわるべくソ連から新しい労働者が送られてきた。ストライキ決行の時に働いた人までも解雇された。街では，失業，不信感，悲哀，絶望が支配する新時代が始まった[46]。

解雇されてもソ連人はすぐに亡命者のグループには入れなかった。新参のソ連人からは敵意を持って見られたが，亡命者からも「モスクワから来た人」としてすぐには受け入れられなかった。

紆余曲折はあったが，敵味方に分かれて戦った実体験のない亡命三世の時代になると，ソ連と亡命ロシアの境界はさらにあいまいになった。もともと，同じような外見をもち，ロシア語をはなし，祖先を同じくする亡命ロシア人とソ連人であるのに加えて，日常生活面でも接近が見られた。子供たちは一緒に遊んだし，亡命生活が長引くと元貴族の亡命ロシア人も貴族的でなくなり，ソ連人は中東鉄道の高給取りの生活が長くなるとブルジョア的になっていた。

1935年，中東鉄道売却により多くのソ連国人が一斉にハルビンを離れた。1929年の中ソ紛争につぐ二度目のソ連引き揚げであった。

> 亡命ロシア人がソ連人を送る時の感情は最初の時とは違っていた。あのときはソ連人が引き揚げるのを喜び，再び亡命者が中東鉄道の主人公に戻れるのではと期待した。今は打ちひしがれ，悲しみに浸っている。ソ連人であれ，彼等は身内であり，ロシア人である。彼等は日本人の前でロシアの威厳を保っていた。情けというものを知らない勝者の手に残された亡命ロシア人は自らの寄る辺なさを苦い思いで痛感するのだった。多くの人は出て行く汽車を悲しい思いで見送った。ここを去ること

46）Якобсон Э. Пересекая границы. Революционная Россия – Китай – Америка. М. 2004. С. 67.

ができれば。しかし祖国への道は閉ざされていた。他の道を探さなければならなかった。遅かれ早かれ「慈善者」は彼らを追い出し，ハルビンは満洲のロシアの都であることをやめるだろう[47]。

亡命ロシア人とソ連人との関係は，この頃では貧者と富者の関係であったが，対日本との関係においては,ソ連人はロシア人としての威厳を保つ「身内」であった。ほとんどの書物にはこの時ソ連人の一斉帰国があったと書いてあるが，当時の新聞を読むと，かなりのソ連人がハルビンに残り，亡命者になったことがわかる。引き揚げなかったソ連人は「非帰還者」とよばれた。彼らが帰還しなかった理由の多くはイデオロギーよりも経済的理由や家庭の事情であった。

6 主体としてのアイデンティティ

従来，亡命ロシア人は祖国であるソ連やホスト国にふりまわされ，アイデンティティの危機に何度も陥った客体として見なされていた。だが，彼ら自身は主体的にみずからのアイデンティティを決することはなかったのであろうか。祖国を見たことのない若者はいかにしてロシアとの結びつきをもっていたのであろうか。

この問題を考えるにはハルビンで生まれ育ったE. П. Таскина（タスキナ）の回想録がヒントになる。彼女はみずからがロシア人であることを確かめることの出来た日としてロシア文化の日を特筆している。

（ロシア文化の日は）1924年に始まり第二次世界大戦の終わりまで毎年祝われていた。〔中略〕荘重なスピーチ，コンサート，合唱団，吹奏楽団，作文コンテスト，飾りのある白いエプロンや女子中学生のお下げ髪につける白いリボン〔中略〕大切なのはこの祝日が祖国についての言葉と受け取られ，我々が偉大なロシア文化に属することを思い出させてくれたことである[48]。

タスキナが指摘しているように，在外ロシア人が初めてプーシキン生誕記念125周年を祝ったのは1924年のことだった。亡命生活も長引き，ナショナル・アイデンティティの危機（当時の言葉を用いればденационализация）を感じるようになっていた。世界に散らばった亡命ロシア人はプーシキン生誕記念日をロシア文化の日として同時に祝うことでロシア人としての自覚を持ち，一体感を持とうとした。

ロシア文化の日は在外ロシアに定着し，毎年6月に世界各地で記念行事が行われ，プーシキンは在外ロシア系住民のナショナル・アイデンティティを編成する手段になった。ロシア文化の日という記念式典は世界中の在外ロシアで類似の催し（詩の朗読，講義，音楽

47）Жемчужная. Указ. соч. С. 239.
48）タスキナ著・生田美智子他訳「知られざるハルビン」『セーヴェル』第21号，2005年，92頁。

会など）を行うことで亡命ロシアに一体感を与えることができた。

亡命ロシア人が開催したロシア文化の日関連行事で最大のものは1937年のプーシキン没後100年記念であった。その規模は，五大陸の42ヶ国，231の都市でロシアのディアスポラは埋没が危惧される亡命ロシアの最後の力をふりしぼり，没後100年を記念した。ハルビンでも連日大々的に記念行事が行われた。

亡命ロシア人にとりロシア文化とは何なのか。なぜ文学の巨匠がロシア文化の象徴になりえたのか。当時若き亡命ロシア人であったラエフは書いている。

> 現代ロシア文化はなによりも文学において余すところなく最も特徴的で，典型的に顕現していると思われる。もとより，文学はたやすく普及し，「輸出」できるし，言語は民族としてのまとまりを規定する主要な要因である。絵画や音楽は〔中略〕普遍的な性格をもち，たやすく西欧文化や世界に同化する。ロシア文学の原点に位置し，かつ到達不能な高所にあるのはプーシキンである[49]。

亡命ロシア人には，民族としてのまとまりを与える領土国家はなく，経済の統一性も，共通の法的義務も権利も残っていなかった。残っていたのは言語と文化だけだった。ロシア語はロシア出身者のコミュニケーション手段であるだけでなく，ロシア帝国の臣民であることを保障する担保であった。ハルビンの法科大学教授Г. К. Гинс（ギンス）によれば，祖国を知らない若者にとりプーシキンが描くロシアの言葉，風景，生活習慣が重要であった。ちなみにプーシキンの作品はロシア生活の百科事典といわれている。プーシキンが純粋のロシア人ではなく，エチオピア人の血が混じっていたことも結集軸となりえた大きな要因であった。彼の文学作品の内容が外国人には到底理解できないことも「われらが作家」意識をかきたてた。

ソ連との関連でこのイベントを見ると，さらに別の側面に気づく。1920年代から30年代半ばまでソ連のプロパガンダが人民の詩人として賞賛したのはネクラーソフやシチェドリンなどの革命的民主主義詩人だった。このことも亡命ロシアがプーシキンを自分たちの詩人と感じる一因であった。ところが，30年代半ばになるとソ連でもプーシキンは評価されるようになり，マルクスやレーニンに匹敵するほどの権威となった。ソ連各地にレーニンの銅像と並んでプーシキンの銅像が建設され，革命前のЦарское Село（皇帝村）はプーシキン市と改称された。プーシキンは亡命ロシアとソビエトロシアが共に賞賛することのできる詩人となったのである。

1937年のプーシキン没後100年は，革命20周年，ソ連建国15周年にもあたり，ハルビンのソ連系の学校や施設でも盛大に祝われ，ソ連本国でもプーシキンの没後100周年は大々的に営まれた。亡命ロシアでもこの追悼は,政治的信条，学歴，年齢も異なる亡命ロシア人が小異をすて大同団決できるイベントであった。亡命ロシアだけでなく本国のソビエト

49）Раев М. Указ. соч. С. 124.

ロシアとも同時に記念行事をおこなうことの意義は大きかったであろう。この記念事業によって「全員一致」というソ連人と亡命ロシア人の一体感を久々に感じることができ，亡命ロシア人は高揚することができた。1937年は彼らにとって祖国はやはりロシアであることを再認識できる一年となった。

一年後の1938年，『朝日新聞満洲版』に「白系露人に聴く」というインタビュー記事が連載された。チチハルで行われた座談会の場で，インタビュアーは朝日新聞本社ハルビン通信部員の麻生潔，出席者は白系露人チチハル事務局次長のポリトコフスキー，コサック団長カフタンチコフ，白系露人軍事部第八部長アファナシエフ中将，コサック団次長兼事務局会計コレネフ，ファシスト党支部長兼事務局秘書チェブリン，事務局書紀ウグリュモフである。白系露人事務局員やファシスト，コサックなど日本の特務機関の御用掛の人選のようである[50]。日本側の意向に沿った答えをねらってのものであった。1938年2月14－16日の三日にわたり連載された。

「あなた達が祖国へ帰る日は来ると思いますか」
「赤色ロシア殲滅の時が来れば，全世界に亡命してゐる人々も帰るだろう。そして今フランスに御亡命中のキリル大公を擁して帝政の再興を実現するでせう」
「あなた方の満洲国の一員としての心構えはどうです」「勿論最も善き国民として最善の努力を尽くしたい」
「それでも『理想』は祖国へ帰りたいことではありませんか。居候気分ぢゃありませんか」
「祖国の再建が出来たら帰りたいのであって，それまではただ軒を借りた気分でいるというような気持ちはりません。〔中略〕満洲国の一国民として尽くす純粋の気持ちはあなた方と決して変わらないものと確信しています」[51]

座談会に参加した人達は白系露人事務局で働いている人やファシスト党の人達なので，日本の特務機関に近い人である。彼らが明言しているように，彼らの祖国はあくまでロシアであり，祖国の再建が目的である。しかしながら，その一方で，満洲国の最も善き国民として最善の努力を尽くしたいという覚悟を披瀝している。

祖国（ロシア）とホスト国（満州国）との二重国籍者であるかのような亡命ロシア人のアイデンティティにおいて分水嶺となったのは，1941年の夏である。この年の6月22日のことをタスキナは以下のように回想している。

私はその日のことをよく覚えている。配達人が運んできた新聞を（映画館の広告

50）ロシア革命と干渉戦の後ハルビンには様々なイデオロギーをもつ反革命分子が集中していた。白系露人事務局は幹部として君主主義者やコサック系団体などの白軍の残党やロシア・ファシスト党員をとりこむことで，亡命ロシア人の間の軋轢の解消もめざしていた。
51）『朝日新聞満洲版』，1938年2月14日。

を見るため？）機械的に無造作に開くとそこには感情を爆発させるようなことが書いてあった。大見出しは「ドイツ，ソ連に宣戦布告〔中略〕」と報じていた。そのとき，家には誰も居なかった。痛みと不安で心が締め付けられた。まるで祖国にいる数百万の同胞が抱える心の痛みと不安が，外なる境界と内なる境界を越えて，私に乗り移ったようであったことを憶えている。

この悲劇的な知らせに対するロシア国外の反応はどのようなものだったのか。これは歴史学者，哲学者，ジャーナリストにとってはとても興味深い歴史の一頁である。比喩的に言えば，この戦争が在外ロシアにとっての分水嶺となったということは，今のロシアでは広く知られている。この知らせは稲妻が木を真二つに割るように亡命者を二つに引き裂いた。多くの亡命者，ソ連に対し過激な反ソ思想を持つ亡命者，特に元軍人の間でも「祖国防衛」の気運が現れた。つまり，ロシアは危機に陥っており，恐ろしく強い敵を一国で相手にしている。その様な場合に，「古い恨み」がいかほどのものであろうか[52]。

戦況が悪化するにつれて，亡命ロシア人と満洲国との関係はただの居候ではすまされなくなってきた。タスキナは以下のように書いている。

（満洲国軍の）兵役義務は切迫してきた悲劇の別の側面だった。召集を忌避した者は憲兵隊の地下室に連れて行かれ，結局，殺害されていた。支配していた軍の上層部は忌避の抗弁や言い訳を容認しなかった。その上，ロシア人新兵の召集を担当していた関東軍の将校であるロシア人ナゴレンとコソフは，この召集活動において，肩章にさらなる星をつけれるように努力していたようだ。これら全ての犠牲となったのは何の権利もない若者で，日本兵営及び1945年以降は強制労働収容所総管理本部の収容所で迫害を受けた。不本意ながら政治的事情の犠牲になった者全員が故地であるロシアで，「雪解け」や名誉回復まで生き長らえたわけではなかった[53]。

しかし，日本がいかに亡命者の主要な敵はソ連の共産体制であるとふきこもうと，社会主義革命からの逃亡者はロシア人のままであった。彼らのロシア性を助長したのは皮肉にも日本の特務機関であった。ソビエト文化への対抗手段としてではあるが，特務機関の亡命ロシア人対策には伝統ロシア文化の教育が組み込まれていたからである。ドイツがソ連に侵攻したとの知らせが入ったときロシア人ディアスポラの祖国を思う気持ちは反ソ感情より強いことが明らかになった。亡命者，特に子供たちは1945年8月ソ連が対日参戦した時，ハルビンに入城してきたソ連軍を熱烈に歓迎した。

1945年8月は「ロシアのハルビン」の終焉の始まりであった。満洲国の瓦解と共に白

52）『セーヴェル』第24号，2007年，114頁。
53）同上，116頁。

系露人事務局も閉鎖された。反ソ闘争を展開していたГ. М. Семенов（セミョノフ），К. В. Родзавский（ロザエフスキー），А. П. Бакшеев（バクシェエフ），Л. Ф. Васильевский（ヴァシリエフスキー），Б. Н. Шепнов（シェプノフ），И. А. Михайлов（ミハイロフ）は死刑となった。Н. А. Ухтомский（ウフトムスキー）は20年，Л. П. Охотин（オホチン）は15年の強制労働収容所送りとなった。1946年8月から9月の間に9000人から1万5000人のハルビン住民がСМЕРШスメルシ（Смерть шпионам!「スパイに死を!」の略）という諜報機関により逮捕された。

残った亡命ロシア人はソ連領事館の管理下におかれ，ソ連人になるように教育された。日常生活のすべてがソ連式になった。ソ連にあこがれていた若い世代の亡命ロシア人は喜んだ。

> 1945年の出来事のあとは，ソビエト映画は郷愁に身を焦がしていた同国人にとり感情的な激発のごとく襲いかかった。それは私たちにとり母国との出会いであり，しばらくでも母国を離れた体験のある人でないと，この郷愁は分からないと思う。特に，やむを得ず母国を去らざるを得なかった人でないと[54]。

それから9年後，1954年にソ連政府は亡命者に処女地開拓に行くという条件で祖国帰還を許した。ほとんどのロシア人がハルビンを離れた。ソ連に引き揚げない者は，約束の地をめざして第二次亡命した。中国に残った者はほんの一握りだった。

1935年の第二次引き揚げの例からして帰還が悲劇になる可能性があったにもかかわらずなぜハルビン住民はソ連に引き揚げたのであろうか。その答えは，ハルビン第三世代でソ連へ帰還したロボダの本の中に見ることが出来る。

> あらゆるロシアの伝統や生活習慣を守ったハルビン魂，祖国に対する古い世代の愛，祖国で暮らした日々の記憶，若者に対する愛国主義的な教育，これら全てが祖国への大量帰還を引き起こした[55]。

筆者が聞き取り調査を行った第三世代のペテルブルグ在住の女性も，祖父母と父母を説き伏せてソ連へ引き揚げてきたといっていた。若い世代のハルビン人はソ連へ引き揚げることで祖国を発見しようとし,世界各地へ第二次移住したハルビン人は他の土地に約束の地を求めようとした。ロシアのハルビンは終焉したが，現在も世界各地に散在するハルビン人は各種の同窓会や同郷会のようなものを立ちあげ，様々の会誌を発行し，ハルビン人

54）『セーヴェル』第23号，2006年，99頁。
55）Лобова И. С. Харбиночка. Хабаровск. 2004. С. 32-33.

であることを確認しあっている。

おわりに

ソ連人と亡命ロシア人との関係に着目した考察から以下のようなことがいえよう。すなわち，政治的な局面で見ると，三河の悲劇に象徴されるような亡命ロシアとソ連の抗争が目に付く。しかし日常生活に着目すると違う光景が浮かんでくる。その第一は，ソ連人と亡命ロシア人が長きにわたりハルビンで混住していたという特殊事情に由来するアイデンティティの形成要因の存在である。言語・文化の共通性と社会・政治的反発を同時に感じるソビエトロシアとの共存の中で，他者となったのは，ソ連人よりむしろアジア人のほうであった。

第二は，日常的な接触により，日本人がふきこもうとした敵国ソ連イメージは，革命や内戦の経験がなく，ソ連人と席を並べて勉強をするなど日常的なコンタクトを持つ第三世代には，有効に作用しなかった。

第三に，ハルビンという独特のトポスの中で「ハルビン魂」という言葉に代表されるような「在外ロシアアイデンティティ」が形成されてきたことである。ハルビンではロシアの伝統や価値を保持しただけでなく，ソ連人との日常的接触による対ソ恐怖感の消滅，国際舞台でのソ連の活躍に由来する祖国への誇りが培われた。

1960年代初頭までにはほとんどのロシア系住民がソ連に帰還するか，第三国に第二次亡命し，ロシアのハルビンは終焉の時をむかえた。前述したように，現在，世界に離散したハルビン人は同窓会や同郷会を立ちあげ，会誌を発行し，回想を残している。かつてロシア人としてのアイデンティティを確認しあったネットワークは，ポストハルビン時代の現在，ハルビン人としての在外ロシアアイデンティティを確認しあっているようである。

＊　本稿は平和中島財団2008年度アジア地域重点学術研究助成「旧満洲白系露人事務局関連文書の調査―ディアスポラ社会の対権力関係と内部構造」（研究代表・生田美智子）の成果の一部である。